明治聖德記念學會紀要　第十卷

研究

「うしはく」と「しらす」てふ言葉の異同に就きて

加藤玄智

本居翁が古事記傳に於て、此兩語の異る意味のあることを、彼の大國主神が天孫に對して國讓をせられし段の註解に於て、暗示的に一言せられたに基づきて、近くは故井上毅氏が大に此二語の內容含蓄に差異あることを、その梧陰存稿に於て力說せられたるより、世擧つて、此二語の內容上の差異に着眼し、遂に此二語は覇道と王道の區別を表はすものと迄論ずるに至つたのである。然るに余の淺學なる紀記等の古典を閱讀し、又萬葉等の諸書を參考せし結果、遂に此見解に疑惑を生ずるに至つたのである。成程古事記大國主神の國禪の段や又後世六國史等に於ては、天皇に「しらす」の語を用ひ、「うしはく」の語を用ひたも

のはないけれども、世間一般の論者が謂ふ如く、元來此二語に王道覇道の如き意味の區分が、夙に具備せるの故を以て、天皇の治世を「しらす」と云つたのではなくして、偶天皇に「しらす」の語を慣用するに至つた結果、元來仁德に富み給ふ我歷代の聖天子の御德と聯想して、遂に仁德を以て世を治むることを「知らす」と解するに至つたので、本來此「しらす」の語に斯かる內容が存してをつたからさう用ひたのではない樣に考へられるのである。則ちその當初に於て「うしはく」も「しらす」も大なる區別は無く、殆ど異字同義であつたと余は思ふのである。之は余のかうではあるまいかと思ふ疑義であり、且つどうもさう思はれてならんと云ふことに就ては、一々古今の書籍を引照して、その論據を示さなければならぬし、又是非さうして大方諸君の高敎に接し度いのであるが、今回は本紀要の頁が許さないとのことであるから、凡て之は他日に讓つて置くとするが、兎に角此「しらす」と「うしはく」の二語が、井上毅氏以來傳承的に考へられてをる王道覇道の區別を、元來その內容上に、持つてをつたと云ふ說に對しては、余は疑義を抱いてをる一人であると云ふことを、此機を以て世に公にし、而て他日もう少し詳細に質疑の要點を申し述べて、江湖諸賢の御敎示に接し度い希望である。

余は本稿を草し終つてから、神道談話會の席上で、此疑惑をもう少し詳細に述べた時、上田（萬）博士は「うしはく」は出雲族の方言「しらす」は高天原族の方言では無からうかと云われたが、それにしても、此兩語の意味上の差があと云ふ說の肯定とはならない。

（大正七、十月八日）